



編さん便り

Chiba-shishi News Letter NO.9 2012.9

千葉市史編さん担当

〒260-0856
千葉市中央区亥鼻 1-6-1
千葉市立郷土博物館
TEL 043-222-8231

日本無線史上のパイオニア

検見川無線送信所の歴史をひもとく

検見川送信所は、現在の千葉市花見川区検見川町に
いまもその局舎の一部が残っている、旧通信省・日本
電信電話公社（現在の NTT）の無線送信所です。

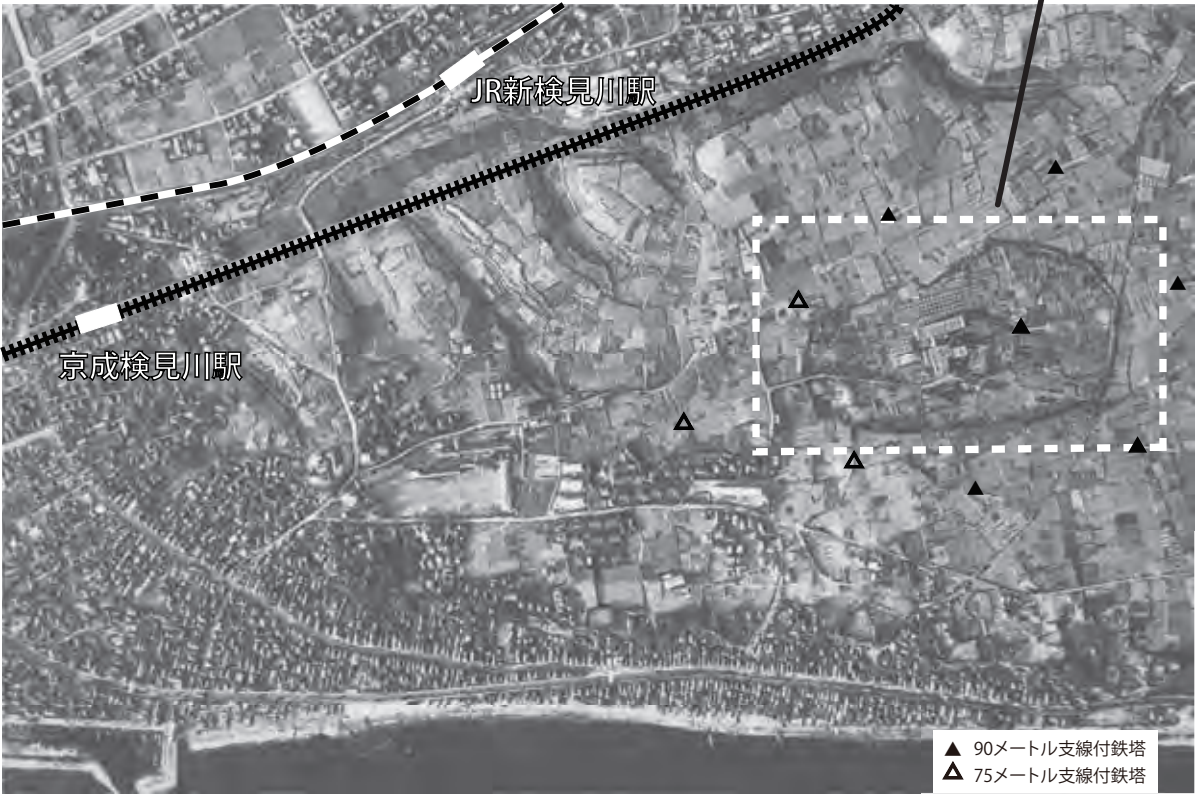
日本初の短波による標準電波の送信、また昭和 5
年（1930）10 月には時の総理大臣、浜口雄幸のロン
ドン軍縮条約締結記念放送で日本初の国際放送を行っ
た施設、また、昭和 7 年（1932）のロス五輪の国内
向け放送の中継を行った施設として知られています。
局舎は東京中央郵便局や大阪中央郵便局を手がけた建
築家吉田鉄郎氏（1894 ～ 1956）の設計で、大正末
期の貴重なコンクリート建築です。

このほど、千葉市史編さん担当で無線送信所の技術
課長を務められたお宅に残された、昭和 34 年（1959）
の施設公開に関わる報告をまとめた簿冊や、検見川無

線送信所の鉄塔で使用された^{がいし}碍子の写真、そして昭和
28 年（1953）3 月刊行の『検見川無線 30 年史』な
どの史料を調査させていただくことができました。今
回はそれらの史料を含め、検見川無線送信所について
紹介したいと思います（参考：『検見川無線史』／『検
見川無線 30 年史』）。



送信所敷地付近拡大（中央の囲いは局舎）



▲ 90メートル支線付鉄塔
▲ 75メートル支線付鉄塔

検見川付上空撮（昭和 36 年撮影 野川齊家文書）



無線アンカーブロック（昭和 27 年撮影）

〈検見川 新井英夫氏撮影〉

ちば歴史散策 こぼれ話

千葉市史編さん担当では、平成 24 年（2012）6
月、検見川小学校所蔵の郷土資料室展示史料（大正
～昭和初期の「検見川区民団」に関わる史料全 10 点）を
お借りし、整理・調査を行いました。「検見川区」
という名称に聞き慣れない方もおられると思いますが、
当時検見川町は、江戸時代の村域を基にして地
勢上 3 区に分けられ、各地区は検見川区・稲毛区・
畑区とされていました（『検見川町誌』大正 5 年）。

史料から検見川区では区の共有財産である土地を
貸し付け、地代として納入された現金や農作物で収
益を得ていたこと、その運営は「検見川区民団」と
いう団体によって行われていたことがわかります。

「検見川区民団」は検見川区の「風教ノ改善」「貧
民罹災民ノ救恤」「産業ノ発展」及び「公益事業」
を図る目的で組織されました。共有地貸付による収
益は、これらの事業に使われていたようです。

第 5 回 検見川区民団

区民団の結成時期については現段階では確定でき
ませんが、大正 5 年（1916）には、千葉郡会議員
や検見川町会議員をつとめた高井国三郎を団長とし
て活動していたことが確認でき（「検見川区民団役
員名簿」大正 5 年）、財務担当者には、のちの検見
川町長篠田豊三郎の名もみられます。高井や篠田
は、『房総町村と人物』（大正 7 年）のなかで、検見
川町の「自治其他功労者」とされ、区民団の運営は、
検見川区の有力者を中心に行われていたといえるで
しょう。区民団の団員資格は検見川区在住の人にと
み与えられており、「検見川区民団」は地域に根ざ
した組織であったと考えられます。

区民団の実態については、まだまだ不明な点が多
くありますが、検見川小学校郷土資料室の展示史料
から、大正～昭和初期の検見川区で、地域の発展と
福利の増進を目指し、「検見川区民団」が活動して
いたことを窺い知ることができます。

平成24年度（後期）千葉市史主催 講座のご案内

1 市史研究講座

定員 200 人。会場：千葉市民会館小ホール。

対象：千葉市に在住・在勤・在学の方。

全 3 回（1 回 2 講演、各講演 80 分）

＊市政日より（9 月 15 日号）にて募集。

講座の応募状況については、別途担当までお問い合わせ
ください（TEL 043-222-8231）。

日程及び各回のテーマは以下の通り。

第 1 回 10/13	1	縄文人の死生観について 堀越正行氏（千葉市史編集委員）
	2	古代上総の北斗七星の聖地 ―市原市稲荷台遺跡― 西野雅人氏（千葉県教育庁文化財課）
第 2 回 10/20	1	千葉妙見大縁起絵巻の再検証 ―妙見伝承の表現と歴史― 久保勇氏（千葉大学准教授）
	2	清盛・西行と千葉常胤 野口実氏（京都女子大学教授）
第 3 回 10/27	1	豊臣秀吉の関東制圧と千葉（仮） 戸谷穂高氏（東京大学大学院）
	2	江戸時代の牧場と千葉市域（仮） 高見澤美紀氏（千葉市史編集委員）

＊講演 1：13:30 ～、講演 2：15:10 ～

2 古文書講座

初級古文書講座

古文書解読初心者対象。テキストは江戸時代に書かれた
古文書の複写。くずし字の基礎を学ぶ講義形式の講座。
全 5 回。講師は高見澤美紀先生（千葉市史編集委員）。
日程：10/25・11/1・11/22・11/29・12/6（何れも
木曜日、時間は 10:00 ～ 12:00）。

＊市政日より（10 月 1 日号）にて募集。10 月 9 日（火）
び切り。前期・後期は同じ内容のため、本年度前期受講
者は受講できません。予めご了承ください。

中級古文書講座

古文書に慣れ、ある程度読める方を対象。テキストは江
戸時代に書かれた古文書の複写。全 5 回。講師は後藤
雅知先生（千葉市史編集委員）。日程未定。
＊日程は決まり次第、市政日より・郷土博物館 HP 等
でお知らせいたします。

＊どちらも定員 40 人。会場：千葉市立郷土博物館講座室。
どの講座も往復葉書でのお申し込みです。

住所・氏名（ふりがな）・年齢・性別・電話番号を
明記のうえお申し込みください。

（葉書一枚につき一人のご応募をお願いいたします）
詳細は市政日より・郷土博物館 HP でご確認ください。

http://www.city.chiba.jp/edl/kyodo/kyodo_top.html

＊申込み多数の場合、抽選となります

検見川無線送信所の歴史

大正初期、海外との通信はイギリスが敷設した海底線通信網に頼らざるを得ない状態でした。しかし無線で遠距離通信が実用化できる見込みがあるとわかり、各国で独自の無線通信網作りが始まりました。こうした短波の通信に使える電波は有限であるため、国際的に調整することになりました。当時日本における無線局は船橋（千葉県船橋市行田、太平洋戦争時の「ニイタカヤマノボレ 1208」電文送信で知られる）と磐城（福島県原町）の二ヶ所のみだったため、大正 11 年（1922）世界無線電信会議準備会において、日本に割り当てる予定であった周波長を取り消す動きが見られ、対抗するため逋信省は無線局設置の予算を立てました。計画では東京と大阪に設置することになっていましたが、そのうち東京分が検見川無線送信所となったようです。

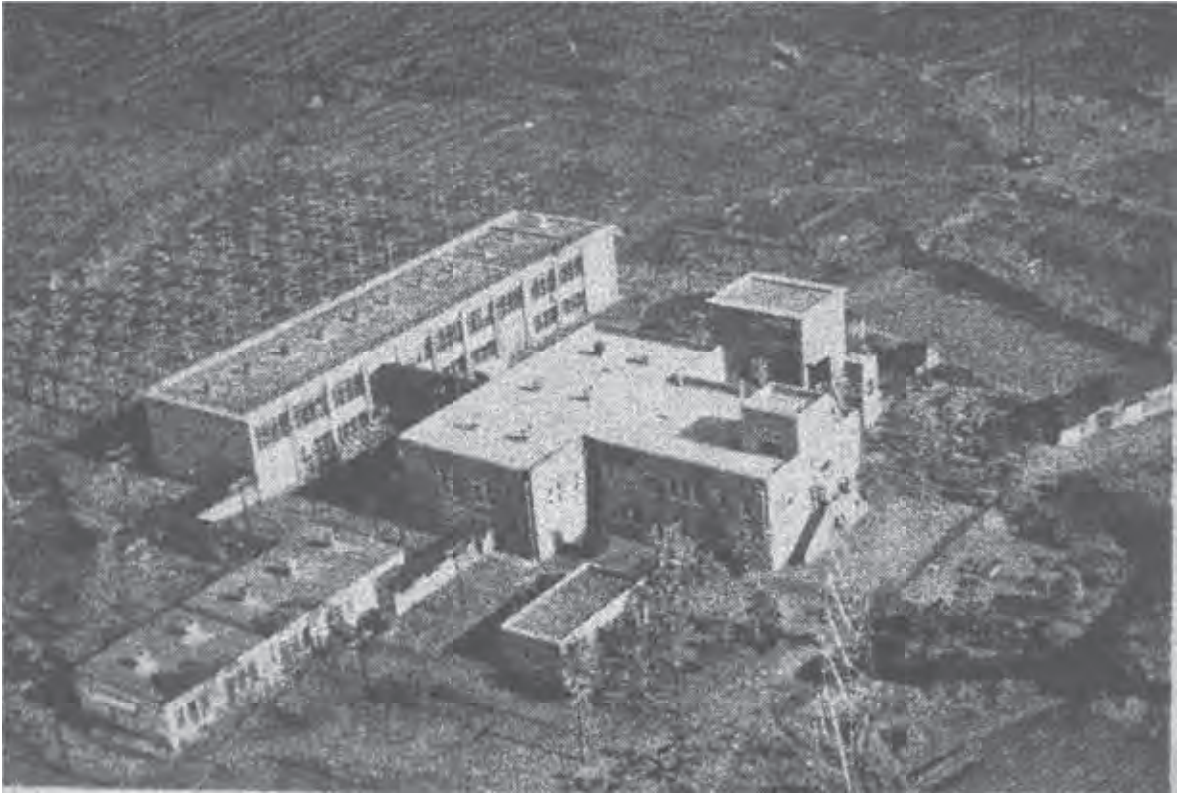
こうしたなか、検見川無線通信所建設が決定したのは同 12 年、その後起こった関東大震災の影響から若干の計画変更はありましたが、埼玉県の岩槻受信所とともに建設され、同 15 年 4 月 1 日に開局しました。当時の新聞には、3 月 14 日の落成に際して「同電信局は、真空管式としては東洋一の無線局で、南洋其他の植民地を主として発信すべく過般試験を行つた結果、良好なる成績を収めた」（『千葉毎日新聞』大正 15 年 3 月 14 日）とし、その後行われた祝賀会について「千葉郡検見川町逋信省無線電信放送局では、十日午後一時より落成祝賀を兼ねて送信式を挙行したが、安達通相・元田本県知事、その他関係者来賓等名士多数出席して頗る盛況であつた」（『房総日日新聞』大正 15 年 4 月 11 日）と伝えています（記事には読解の便宜上読点等付しています）。

同年 3 月に作成された「東京無線電信局検見川送信所及岩槻受信所設備大要」（藤代半七家文書）では、設置の目的を「植民地及内地における主要無線電信局と直接通信する」こととしています。国外に対しては標準電波・同報無線通信・軍用通信などで用いられ、国内でも札幌・金沢・大阪・広島・鹿児島との間に直通通信網が作られました。また、民間航空事業が始まると、航空無線も扱うようになりました。そうして昭和 17 年（1942）には、通信量が増えたため臼井送信所（千葉県佐倉市）が開局しています。

検見川送信所の位置は「検見川町大字廣原」、局舎の敷地は 19,043 坪・鉄塔及び支線用の敷地は 1,145 坪、そのほか官舎の敷地として 3,600 坪が計画されていました。鉄塔は 90 メートルの高さのものが 6 基、そのほか 75 メートル 3 基、30 メートル 2 基がありました。航空写真と敷地の図を比較してみると、その広大さがわかります。当時の検見川は海沿いの漁村、房総往還

沿いは検見川宿として比較的賑わっていたものの、送信所一帯は甘藷畑でした。航空写真は昭和 36 年（1961）に撮影されたものですが、それでも往還沿いと比べて開発されている様子はあまり見受けられません。

戦中は、当初の目的通りアジア植民地との送受信の重要基地として機能していました。終戦後は国内の有線通信網が破壊されたため、検見川送信所の扱う短波が通信の大動脈となりました。RC 通信（不時着した連合軍航空機搭乗員遭難救助に関する通信）や復員のための通信、朝鮮動乱に伴う京城との通信なども手がけました。一方、開局以来さまざまな調査や研究が行わ

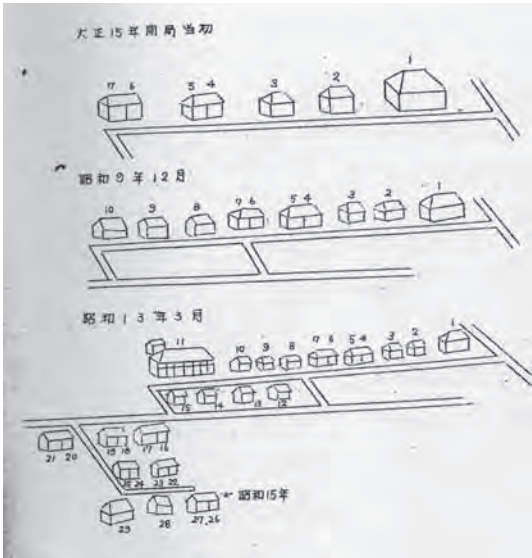


局舎全景（『検見川無線 3 0 年史』より）

れました。その中には持ち運びできる無線機を使った「極超短波」の伝播情況の調査もあり、これは現在の携帯電話につながる実験でした。

昭和 30 年代ごろからはアンテナ下の敷地に民家が建ち始め、周辺とのトラブルが多くなりました。対策としては周囲の土地の買収などが考えられましたが実現せず、後で記述する施設公開などを通じて周辺住民との協調をはかっていくことになります。

送信所の職員は最大で 76 人（昭和 26 年時点）を数える大所帯でした。初代所長を務めた菊谷秀雄氏（閉局時の所長は 25 代）は、『検見川無線 30 年史』の中で職員たちの住まう官舎について触れていますが、当初官舎は 7 棟しか建設されなかったため、当時はそれでも 29 名と比較的少なかったものの職員の住居としても足りず、極力地元の人間を雇うようにしたと書いています。それでも他所から来た職員もいるので、「町の



官舎の変遷（『検見川無線 3 0 年史』より）

施設の公開

昭和 34 年、第十回電信電話記念日を記念し、検見川送信所が開所以来初めて一般公開されました。当時の新聞記事によれば、地元の千葉市民にすら存在をあまり知られていないということで、PR を狙ったものであると書かれています。施設公開の報告書にも「空中線使用地関係農民」の無線送信所に対する認識と理解・協力が絶対必要であり、施設公開に踏み切った旨が書かれています。公開は 3 日間で、初日 695 名・2 日目 932 名・3 日目 356 名の参観者があり、その内訳は検見川・花園・畑・稲毛の小学生、花園の中学校生、そのほか高等学校の生徒や花園町・検見川町の一般の人々でした。これに地元検見川町の地主や「耕作者」などの招待者 95 名を加え 2080 名もの人が参観し、展示品の陳列やスライドによる説明、経路の検討など職員が総出で対応をしている様子がうかがえます。説明の台本には何度も訂正がされ、当日に備えていたことがわかります。それだけ地元民の理解を得ることが重要だと考えていたのでしょう。残念ながら報告書には参観者たちの感想は載っていませんが、写真には熱心にメモを取る中学生らしき姿や、普段では見られない機械に興味深そうに見る親子連れの姿などが写っています。



（野川齊家文書「施設公開関係（施設公開に関わる諸記録綴）」より）

検見川無線送信所は、その歴史的に果たした役割にしても、また建築史上でも非常に重要な建造物であるといえます。当時の検見川町周辺に与えた影響も非常に大きなものであったでしょう。

大正12年	2月9月1日	無線通信計画のうち一部の予算・事業案が議会を通過*関東大震災→無線通信計画中止
大正15年	4月1日4月10日7月1日	検見川無線送信所開局送信式業務開始
昭和2年	11月	標準電波発射業務開始（日本初）
昭和5年	10月27日	内閣総理大臣浜口雄幸のロンドン軍縮条約締結記念演説をアメリカ・イギリスへ向け送信、日本発の国際放送
昭和12年	2月11日	*検見川町が千葉市に編入
昭和14年	9月	*第二次世界大戦勃発
昭和15年	1月30日	短波JY開設（世界で二番目の短波対標準電波局）
昭和17年	9月1日	電力受電　京成電軌より関東配電に変更
昭和20年	8月15日8月15日	*終戦のラジオ放送終戦、各通信回線休止、記録文書類焼却
昭和21年	8月6～7日	米軍が送信所を占拠、全通信停止
昭和25年	7月22日	朝鮮動乱に伴い、釜山と国際商用通信開始
昭和28年	3月	30年史刊行
昭和38年	2月11日	*千葉市検見川第二地区土地区画整理起工
昭和54年	9月2日	全業務を名崎無線送信所へ移管
平成20年	6月30日	DOCOMOMO（近代建築の記録と保存を目的とする国際学術組織）選定126番となる

表中＊は検見川無線送信所の動きに直接関わらないもの